

## 日本プロテスタントキリスト教史における説教 ——コミュニケーションとトランスフォーメーション——

山口陽一

### はじめに——継承すべきこと

日本福音主義神学会は、これまで「説教」についての多くの研究を重ねてきた。1985年の福音主義神学会第三回神学研究会議は、「福音主義の聖書解釈と説教」を「神のことばの釈義であり、神のことばの説教である」と確認した。そこでは福音主義の聖書解釈をめざして「歴史的・文法的・批評的解釈と説教」、「釈義から説教における聖霊のはたらき」、「教会における釈義と説教の位置づけ」が論じられている<sup>1</sup>。そして翌年の『福音主義神学』17に、津村俊夫「福音主義の聖書解釈——その方法論の確立をめざして」、宮村武夫「聖書解釈の基盤と方法（論）をめぐって」が掲載される。さらに12年後の『福音主義神学』29には、藤原導夫「説教と聖霊——スボルジョンの説教における聖霊の力について」、内田和彦「新約聖書釈義から説教へ」、金田幸男「日本キリスト改革派教会の説教」が掲載され、第三回神学研究会を継承発展させている。

今回の神学会議が「説教 コミュニケーション（伝達）&トランスフォーメーション（変革）」をテーマとするにあたっては、福音主義神学会のこれまでの研鑽を継承して「聖書、聖書解釈・聖霊・教会」を前提とすることをまず確認すべきである。すなわち、福音主義教会における説教は、神のことばである聖書の説き明かしであり、靈感された聖書は召命を受けた説教者によって聖霊の

<sup>1</sup> 丸山忠孝「第三回神学研究会議 総評」『福音主義神学』17（1986年11月）

働きの中で会衆に語り明かされる。神のことばは説教としてすべての人に語られ、罪人を悔い改めとイエス・キリストへの信仰に導き、神のことばを聞き分ける人々が生み出される。ここで説教は、教会形成と神の国の実現をめざすことになるが、もとより聖書は教会に占有されるものではなく、神の民をこの世から呼び出すことばでもあり続ける。説教とは、神の召命を受けた人が教会によって立てられてすべての人に語りかけることばであり、神によるコミュニケーションとトランスフォーメーションの仲立ちである。

説教には、積義、伝達、変革という要素があると考えられる。積義は、古代に記された神のことばを現代において理解する作業である。伝達は、神から人を介して人になされ、ここにコミュニケーションが生じる。説教者は正しい積義に力を尽くし、これを可能な限り自らの経験としつつ、会衆に適用するように熱誠をもって伝達する。一義的にはここまでが説教者の責任であり、悔い改めと回心・戒めと慰め・神の民である教会の結集と成長、社会の改良などの変革（トランスフォーメーション）は、聖霊の働きに待つべきものである。神のことばが正しく理解できるように伝達されたにも関わらず、聴く者に変革が起きないことは有りうるからである。とはいえ説教者は、会衆のトランスフォーメーションを期待しないで説教することはない。ゆえに積義と伝達に加えて変革を説教の課題と考えることができる。ちなみに、変革には大小広狭さまざまあるが、ローマ 12 章 2 節で「心の一新によって自分を変えなさい」と訳されるメタモルフォオー（μεταμορφώω）はその核心である<sup>2</sup>。

今回、福音主義神学会が説教における「コミュニケーション&トランスフォーメーション」をテーマとした背景には、福音派教会における 1995 年頃からの教勢停滞、伝道、特に青年伝道の鈍化、社会に与える影響力の低下などが意識されていると思われる。そこでは説教者から会衆へのコミュニケーション（伝達）の現状、課題、対策などが主なる関心事として取り扱われることになるであろう。時代の変化と世代の変化に対応することが説教の重要な使命なのであるから、この努力を怠ることは許されない。ただし、その前提としての積義も

<sup>2</sup> μεταμορφώω は、主イエスの変貌のところで「御姿が変わり」（マタイ 17 章 2 節）、Ⅱコリント 3 章 18 節では「栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます」と用いられる。

神の語りかけを聴き取るという意味でのコミュニケーションがあり、これが疎かになってしまえば、説教者と会衆とのコミュニケーションは意味をなさない。つまり説教におけるコミュニケーションとトランスフォーメーションは、積義から説教までの全体に関わる課題なのである。

日本におけるキリスト教史から、積義から説教における伝達と変革を検討するという課題は、福音主義神学会から私に求められたものである。そこで「コミュニケーションとトランスフォーメーション」というテーマを意識しつつ、日本のプロテスタントキリスト教史における説教について歴史的に検討することにする。

## I. それぞれの説教力——明治維新から大正デモクラシーまで

人は耳新しいことを聴きたいものである。さらに、禁じられているとなればますます聴きたいのが人情である。幕末から明治維新期のキリスト教の説教は、250 年にもおよぶ禁教迫害とそこで擦り込まれたキリシタン邪宗観に凝り固まった人々に対してなされたのであるから、困難であったことは言うまでもない。しかし、その一面で人々の関心は極めて高く、これはコミュニケーションのためには好都合でもあった。

1875 年に、法典長老教会の安川一が D・タムソンから教えられた『宣教心得』は、我が国における「説教」のさきがけである。説教は文字通り宣教であった。タムソンは適切な「題」（聖書箇所と主題）の選択を最重要とし、実に実践的に「宣教」の方法を伝授している<sup>3</sup>。説教者たちは自らが会得した新知識として文明や宗教を語り、野蛮な偶像礼拝を去って真の神を信ずべきことを自信を持って語った。この時期の説教における「説教」と「宣教」の同義性、また「体験と自信」は特筆してよい。当時のことばでは「信仰の実験」と表現され、内村も植村もよく用いている。これに教える身分としての士族の意識、人に先駆けて新知識を身に付けた知識人の自負が加わると、いよいよ説教は強い影響力を發揮した。

<sup>3</sup> 翻訳筆記『宣教心得』、船橋法典の安川厚家所蔵

## 1) 最初の日本人説教者奥野昌綱

J・C・ヘボン は 1877 年 7 月 11 日付書翰において、住吉町（横浜指路）教会における日本人の説教者について以下のように語っている。

「日曜日の日本人教会の説教は、東京から来た日本人の教職、戸田と高橋両君<sup>4</sup>の援助を得ました。交互に安息日に教壇に立ち、それだけわたしの仕事は軽くなりました。わたしは時々しか説教いたしません。これら両君は立派な人物であり、立派な説教者です。弁舌さわやかで、堂々たるものです。だからわたしは両君を手離したくないのです。彼らも多くのところで説教しているからです。横浜の教会の長老はいつでも説教はできますがあまり上手とは申しません」<sup>5</sup>

1877 年 10 月、日本基督一致教会の設立に伴い小川義綏、奥野昌綱、戸田忠厚は日本で最初の牧師に按手された。韓国での牧師按手は 1907 年であるから日本が 30 年早い。ここではその中の一人、奥野昌綱の説教について考察する。

奥野は 55 歳、文政 6 年 4 月 4 日、御徒士町において徒士の竹内家に生まれ、文武を修めた人である。槍術、笛・笙、狂歌や漢詩、特に和歌に勝れた多能多芸の人であり、弘化 4 年、25 歳で奥野家の婿養子に迎えられたが明治維新で一切の資財を失い、1871 年小川義綏の紹介でヘボンの日本語教師となった<sup>6</sup>。ヘボンの『和英語林集成』改訂の助手を 8 ヶ月務め、ヘボンが同書再版のため上海に赴いた後はブラウンの聖書翻訳の助手となった。ここにおいてヘボン、ブラウンは最良の日本語教師を得た。奥野は聖書翻訳を手伝うことで魂を耕され、バラの「ペテロの拒絶」と題する熱誠溢れる説教によって回心し、1872 年 8 月 4 日、日本基督公会においてブラウンから洗礼を受ける。50 歳の時であった<sup>7</sup>。

<sup>4</sup> 戸田忠厚と高橋亨（安川亨）と思われる。高橋は五郎の可能性もある。

<sup>5</sup> 岡部一興編、高谷道男・有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』教文館、2009 年、340 頁

<sup>6</sup> 奥野についての記述は、黒田惟信『奥野昌綱先生略伝並歌集』（一粒社、1936 年）による。本書は奥野からの聞き書きである。幕末、彼は慈性法親王家、公現法親王家（後の北白河宮能久親王）に仕えた。

<sup>7</sup> 全国で 27 番目。ブラウンからの受洗は、他に井深梶之助、眞木重遠への例があるが稀である。

その後、奥野の学識は、漢訳の旧新約聖書、『天道溯原』、『格物探源』、ファールの『馬可伝講義』等の訓点本出版において遺憾なく発揮される。それと共に、彼は説教に力を注いだ。1872 年のクリスマスにはバラの自宅で「言ひ尽されぬ神の賜」と題して語り、バラから銀時計をもらっている。翌年の初週祈禱会では「聖国を臨ませ給え」という初めての説教をしている。この年長老に選ばれた彼は伝道に燃え、2、3 年はペテロの悔改めを語り続けた。奥野の弟子の黒田惟信は言う。

「固より先生の説教は、長きに失するの弊があり、又朗読説教にて、自然に其語法も文語体に傾き、稍や堅苦しい嫌があったけれども、その得意とせる『ペテロの失敗』を始めとし、『バルテマイの救』・『蕩児還父』及び『筐中のパウロ』等の如きは、何れも皆先生の経験を濾過して出づる生命の水の如く、津々として妙味の尽きざる者があったので、余り文字のない聴衆であっても、決して倦怠の色を現さなかった」<sup>8</sup>

越前で一年間の教鞭を取り終えて横浜に帰ったグリフィスは、奥野の放蕩息子の説教を聴き「わたしは心を奪われた。日本語というものは、説教者自身がたしかに聖霊に満たされるように、聖霊によって十分に満たされてきたように思われた」と感嘆している<sup>9</sup>。

牧師となった奥野は、麴町教会（1877 年 11 月～82 年 3 月）を皮切りに約 30 年牧会伝道にあたり、隠退後は三度の巡回伝道を行っている。彼は晩年に至るまで原稿に改訂を加え、一篇 2～30 枚の説教 2～30 篇を一巻として三巻の説教集を作り、さらに改訂を加えた一巻千枚の説教集を二巻携帯していたという<sup>10</sup>。伝道心に燃える彼は、説教の学びと実践の間で悩んだ時、ブラウンから両方せ

<sup>8</sup> 黒田惟信『奥野昌綱先生略伝並歌集』一粒社、1936 年、103 頁

<sup>9</sup> W・E・グリフィス・渡辺省三訳『われに百の命あらば』キリスト新聞社、1985 年、195 頁

<sup>10</sup> 奥野の説教原稿について黒田は、最初の合本 3 巻と初稿の一篇一冊のものは門生知人に分与され自身もその一巻を秘蔵していると記している。国際キリスト教大学アジア文化研究委員会編『日本キリスト教文献目録—明治期—』1965 年には、「A0113 奥野昌綱説教集 稿本 4 冊 新栄教会」（6 頁）の記載があるが、現在、新栄教会にこの稿本はない。

よと教えられたことを心に留める。「わたしはあるときからあなたの言葉に従って—勉強しながら説教し、説教しながら勉強を続けています」<sup>11</sup>。日本プロテスタント最初の説教者のとどまるところを知らない説教研鑽と伝道の熱心を心に刻みたい。奥野の「経験を濾過して出づる生命の水の如く」という説教は、当時の説教者に共通のことと思われる。これに加えて奥野が原稿に手を加え続けたことが「余り文字のない聴衆でもあっても、決して倦怠の色を現さなかった」というコミュニケーションを成り立たせていたと思われる。

1882年にカラカワ旧ハワイ国王が横浜海岸教会を訪れた時、遅れた到着を待つ間に乞われて説教を始めた奥野は、元国王が到着しても説教を止めず、止めさせようとする人々に憤激して言った。「兄弟よ、姉妹よ、縦令、国王の臨御たりとも、自分は天地万物の主宰にまします真の神さまの御話を致して居るに、このさまは何事ぞ、よしよしそれでは、私もこれより退場いたします」<sup>12</sup>。生来の短気でもあるのだが、日本最初のプロテスタント牧師は、伝道の熱心と共に、説教とは天地の主宰者たる神のことばを宣べることと弁えていた。これは説教権に関わることであり、「神によって、神の御前でキリストにあって語る」(Ⅱコリント2章17節)自覚として現われる。奥野にはこの自覚があったことがわかる。

## 2) 日本のプロテスタント教会を形成した説教

開化期の説教には、神のことばを聴くために整えられた会衆がいるわけではない。説教は常に伝道説教であり、説教中にヤジが飛ぶこともめずらしくない。娯楽の少ない時代に野次馬のような会衆を前にして語る説教は、皮肉にもコミュニケーションの要素を多分に有していた。会衆を引き付ける力がなければ誰も聴いてくれないからである。アメリカで会衆派の説教者として訓練を受け、1874年と1876年に帰国した新島襄と澤山保羅は、存在そのものが文明開化、新知識の充満であり、何をどう語っても効果抜群であった。士族と平民という身分の違いは、士族が学問をして教える役柄であっただけに語る力に現われた。

<sup>11</sup> グリフィス前掲書、197-198頁

<sup>12</sup> 『植村正久とその時代』第2巻、教文館、1976年復刻再版、195頁

また、昨日まで同じ生活をしてきた仲間が回心により一変した生活の証しとして語る言葉にも説得力があった。1881(明治14)年に大阪心斎橋で売り出された排耶番付表「耶蘇退治馬鹿のしんにゅう」には、「説教の二字を削られる耶蘇徒」、「耶蘇法を聞いたおり身体ハ天へ上るといふ奴」、「耶蘇教を飯も食わずに聞に行く奴」、「耶蘇物語を聞に角の芝居へ話かける奴」等、キリスト教の説教を揶揄する言葉が見られ、裏を返せば当時の説教の隆盛とこれを聴く人々の様子を示している<sup>13</sup>。

霊南坂教会で東京の知識層の心をとらえた小崎弘道の説教は、時代に対する敏感さや知識の広さを感じ、いかにも主張明瞭で手慣れている。小崎は『日本帝国の教化』<sup>14</sup>の第三章「我等は何を説く可き乎」二節「説教の特徴」において言う。

「説教は福音の宣伝であって、講義や演説とは全く其の目的を異にするものである。(中略)説教は単に自己体験の真理を説くのみでなく、神の啓示を受けてこれを伝へねばならぬものである。(中略)されば私共は、先づ自らよく聖書を研究し、キリストの救いを体験し、神の霊を受けて其大事業を適切に伝ふることが肝要である。説教者に最も大切なるは、其の人格であるのはこれが為であって、多くの場合、説教の影響の大小深淺は、其の人の人格の直接なる反映なることを見る」

続く第三節において小崎は「近時流行の説教」に触れる。そして倫理的宗教、社会的宗教、新神学の福音を否定し、第四・五節において「神の愛」「キリストと其の十字架」を力説して言う。

「私共にして、生けるキリストを偕にあるの確信を以て、常にキリストと其の十字架を主題として講壇に立つ時は、所謂鬼に金棒で、如何なる大敵にも打ち勝つことが出来、今日の教勢を一変し得ることは疑ふ可らざる所である」

同じく組合教会の元老と呼ばれ大阪の庶民の心をつかんだ宮川経輝は「余は説教の為に聖書を読む事は避けるようにして居る」と言う。毎朝半時間の聖書研究を重ねて巻中の記事については囊中のものを捜るがごとく精通し、説教に

<sup>13</sup> 大濱徹也『明治キリスト教会史の研究』吉川弘文館、1979年、口絵

<sup>14</sup> 小崎弘道「日本帝国の教化(日本基督教伝道論)」1929年、『小崎弘道全集』第2巻、警醒社、1938年